
現遊びの夢幻

矢羽 彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現遊びの夢幻

【Nコード】

N7551L

【作者名】

矢羽 彩

【あらすじ】

「誠也の声、前から欲しかったのですよ」 ことの企てを考え、始まりを起こしたのは彼の友人であり長年の幼馴染である南野友留であった。なんと友留は声マニアであったのか！？ 彼に声を取られた誠也は何も話すことができなくなってしまった！ どうしようか。とにかく不便なことこの上ない。日常に満足していた平凡な誠也は声を取り戻すために非日常に遭遇する。

抜き取られた声（前書き）

昔書いた小説をちよこつと手直ししました。
軽い内容なので気楽にお読みただけだと思います。

抜き取られた声

「あーめっちゃ、よかった。南野に借りたこのCD」

やっぱりあいつは音楽のセンスがいい。

っていうか俺の趣味をよくわかってる上でのチョイスがうまいな。

城山誠也は、同級生であり幼馴染である南野に先日貸してもらった音楽CDを聴き終わると満足気にそう言った。

「次のCDいくか」

誠也は自分の部屋で、先ほどまで聴くために入れていたCDをデッキから取り出す。

そして手に持っていた、もう一枚のCDをセットすると再生ボタンを押した。

されどいくら待てども、何度再生ボタンを押しても、一向に曲は流れてこない。

「あつれー？ おかしいな」

怪訝に思いながらも、もうしばらく待つてみる。

だが、流れてくるはずの音は機械から全く出てこない。

雑音すら聞こえてこなかった。

接触でも悪いのだろうか、と思った誠也は

仕方なくCDを一度機械から取り出してから、もう一度ちゃんとセットし直そうと思って立ち上がる。

そのとき。

「誠也 ご飯よー」

階下から母親がのんびりとした声で自分を呼ぶ。

それに対して誠也はいつものように「今行くー」と階下にまで聞こえるように多少大きな声で返答しようとした。けれど。

（あれ？ おかしいな）

声が出ない。

しかも咽喉がふるえる感じもしない。

風邪の時などに咽喉が痛くても、声を出そうとすると声帯が振動していることがわかるというのに。

不思議に思って首を傾げながらも明確なことは分からない。

とりあえず夕飯のため、階段を下りていく。

「あんた風邪でも引いたの？」

階下に降りて、食卓に着くなり誠也の顔を見ると開口一番に母親はそう言った。

先ほどの呼びかけにいつもはきちんとある返答がなかったので誠也に元気がないのだと母親は思ったようだった。

誠也はどんなに不機嫌でも無視はしないようにと育てられたので言葉はちゃんと返す主義だ。

それなのに家にいて答えがないということは具合でも悪いのだとしか考えられなかったのだ。

（声が出ないんだよ）

ぱくぱくと大きく口を動かして、どうにか口朴で声が出ないことを母親に伝えようと試みる。

誠也の方を見つめるもどういった言葉を発しようとしたのかが解せなかった母親は不思議そうな表情を浮かべる。

しかし、なんとなく行動の意味はわかったので恐らくは咽喉の調子が悪いのだろうと察するとすぐに普段通りに戻った。

さほど具合が悪いようでもないし、ただ少し咽喉が痛いくらいなら心配なかるう、と。

「何を言っているのかまではわかんないわよ。必要なら紙にでも書いてちょうだい。」

まあ今はいいわ、さつさと食べましょう」

せっかくの温かい料理が冷めちゃうわ。

料理の段取りを大事にする母親は、いつも食卓に並ぶ品の温度を絶妙なタイミングになるように心掛けていた。

「きっと風邪かなんかで喉でも痛めたのでしょ。食べたら寝ていらつしゃい」

と母は言った。

母親の「寝れば治るわよ」という言葉に誠也はそうかもな、と思いつつも

さつきまで普通に出ていた声が突然出なくなるなんておかしいものだ、と思った。

一体全体どうなっているのだろうか。

事故や熱、衝撃的なことによって声が出なくなるといのはドラマや小説で知っているけれども

何も特別な出来事も起こらずに、いきなり声が出なくなるなんてことあるのか。

しかも妙なことに、ただ声が出なくなったというのとは違う感じがする。

何と言ったらいいのだろうか。自分でもよくわからないけれども、声をまるごと奪われたような・・・。

箸を口に運びながら食事をしていた誠也が出なくなった声のことについて考えていると、

かたん

というかすかな物音が二階の方からしたことに気がついた。

誠也は聴覚が普通の人よりは若干敏感で小さな音も聞き逃さない。その音が二階のどこからしているのか、すぐにわかった。

（自室からだ！）

ご飯をかきこむのもそこそこに、ごちそうさま、と一礼して食器をシンクにつけると急いで、

けれど足音をなるべく立てないようにして誠也は二階へと上がっていった。

抜き取られた声（後書き）

ゆる〜っと続きます。

突然消失した声の行方

自室のドアを開けて部屋の明かりをつけると、そこにはやはり侵入者の姿があつた。

しかし、それは空き巣でもなんでもなく誠也の知っている人物だった。

「ああ、見つかつてしまったのですね」

同い年で幼馴染のくせに敬語で話すそいつは、先ほどまで誠也が聴いていたCDを貸してくれた張本人だった。名を南野友留という。

（み、南野！？）

言葉を発しようとするが、またもや口ぱく状態のまま。声は出てこようとしない。

これでは友留にも誠也の言いたいことが伝わらないだろう、と思いきや

「あーはいはい。それで、わかりますよ」とあっさり理解された。

母よりも長年の腐れ縁の幼馴染の方が誠也に対して理解があるのだろうか。

幸か不幸かは知らぬが、誠也の声が出なくなったことによる物言わぬ心の内の戸惑いまで伝わった気がする。

母には通じなかったというのに。

「声が出ないんでしょう？」

当たり前のことのように友留は誠也にそう問いかける。

（そうなんだよ。急にさあ。なんでだろう？　そういえばお前なん
でこんな時間に？　しかもこっそりと俺の部屋に忍び込んでなんて
いるわけ？）

長々とした言葉を友留は誠也の口元をじっと見つめて読み取った。

そういえば、と誠也は思う。

友留とのつきあいは長いが自分の部屋にやってくるのは珍しい。し
かも前触れもなしに突然とは。

今までになかったことだ。

いったい何の用で訪れたのだろうか。

止めどない疑問を思い浮かべる誠也を友留の声が現実に取り戻す。

「声が出ないのはこれのせいですよ」

友留は自分が誠也にかした二枚のCDのうちの一枚　曲が流れな
かったほうのCDだ　を掲げた。

そして誠也が口にした次の質問へ。

友留は静かに答える。

「それで僕がここにきたのはですね、これを回収したかったからで
すよ」

自分が手にしたCDへ視線を向けると、それを懐にしまう。

（へ？）

口をぽかんと開けて阿呆面をさらした誠也に友留は淡々と言葉を続
けた。

「君の声、前から欲しかったのですよ」

（はああああ！？）

友留が何を言いたいのか、何を言っているのか、
わけがわからない。

脳が理解を拒む言葉を聞こえた。

混乱状態になっっている誠也は意味不明だ、
というのを顔いっぱい表す。

「ふふ。実はですね、このCDに誠也、君の声が封じられているの
ですよ。」

いや吸収されたというほうが正しいかな。うーん」

誠也を放っておいて、いきなり一人思考に沈む友留に懔然としつつ
も、

なんだか自分の手には負えなさそうな事態が起こっているようだ
と
うっすらと感じる。

困った時はシミュレーションとばかりに

誠也は自分の頭をフル回転させて今後、友留に何をいわれても大丈
夫なように

また反論できるようにその状況を想定する姿勢に入る。

しかし、その努力は空しく徒労に終わる。

「あ、それでは、これで今日の用事は終わったので失礼します」

唐突に思考を打ち切り、そう言うなり窓から出て行こうとした友留
の服の袖を

逃がしてなるものかと誠也は急いで掴んだ。

まだ正確な状況を把握していないまま出ていかれてたまるか。

頭は混乱していたが自分の声を取り戻すには友留をどうにかしなけ

ればならないということは漠然と分かっていた。

窓枠に足をかけ、いざ踏み出そうとしていたところだったのだが急に後ろに引っ張られたため、友留の身体は前へとつんのめった。

バランスを崩して倒れそうになったのをなんとか防ぐと身体を安定させる。

そして文句を言うために友留は背後を振り返った。

「おっと。何をするのですか！危ないでしょうっていつか今日着ているこのマントは先日の雨でもう代わりがないんですから袖が破けたらどうするんですか」

代えのきかない衣を破かれてはかなわないと友留は急いでマントにかかった誠也の手をはずそうと試みる。

その慌てようにしょうがないなと思い、誠也は手を離してやることにした。

しかし代わりに今度は裾を足で踏みつけてやるのだった。

突然消失した声の行方（後書き）

変人、友留の登場です。

幼馴染の一面

「なんですか？」

手が外された瞬間、窓の外へと動こうとして、結局はマントの裾を踏みつけられる。

その一連の流れを目にした友留は、仕方なさそうにため息を一つこぼした。

諦めて、この際とつと済ますしかないと見てとって、誠也に問いを向ける。

用件をさっさと言ってくれ、としばらくは背中を向けたまま無言で促す。

けれども、誠也は早くトンスラしようとしている友留をそのまま行かせてやるほど親切ではないし、間抜けでもない。

第一、どうやら話を聞いて大雑把に推測した結果、現状の誠也が困っている問題の原因を持っているのは友留なのだ。

止める権利はあっても逃がしてやる義理は誠也には、ない。

友留の目はこちらに向いた、と思ったときに誠也は話しかけた。

くちぱくで、だが。

（お前、なんで俺の声なんか欲しいわけ？　っていうか、どうやって人の声帯を取るんだっての）

胸中でまさか単に声マニアとか言わないよな！？
とか誠也は考えてみる。

答えを得んがために必死となっている誠也に目を留めつつも、その瞳には何も感情が映らない。

友留はただ言葉を発するのみ。

「あー誠也には言っていなかったのですが。実はですね、僕は魔術具販売人なんですよ。それである特殊な実験用の生物が今顧客から注文が入ってしまして」

（それとこれとどういう関係が）

耳にした言葉は普段はなじみがない得体のしれないものだった。さっぱりわからない。

特殊な生物の注文と誠也の声の関係性が思い当たらない。

だが困惑する誠也に、友留はいえいえ、と否定すると説明を続ける。

「大有りですよ。その特殊な生物を捕獲するのに必要なものがありまして。

それが声、なんですけれどね、その生物が気に入る声質でなくてはならないですよ」

もう条件がいくつもあって面倒くさいんですよえ。

そつぶちぶち言つと友留は言った。

「で、君の声がその生物の好みにピッタリんこだったわけですよ！」
嬉々としてそう話す友留に誠也は先ほどまでの困惑はどこにやったのか。

従来の現実主義に戻って冷静に、突っ込みを入れる。

（ピッタリんこって何だ。お前それおかしい）

「うるさいですね、ノリですよノリ」

呆れたような、冷めたような誠也の目に友留は焦ることなく言う。
むしろ冗談を解さない奴だな、的な雰囲気である。

それにしても誠也の声がその注文のなんたらかんたらにぴったりだなんて

一体いつそんなの調べたのだろうか。

友留とは普通に遊んでいた、くだらない話をしているだけだったのに。

おかしい行動なんて今の今まで一度の目にしたことはなかったように思う。

それを考えると誠也は少し友留が怖くなった。

誠也に隙なんてものは、いくらでもあるのだろう。

それを友留は利用して、作戦を練ればいいだけだったのか。
想像して一瞬、寒気がした。

今度からは友留には十分に気をつけなければ、と誠也は自分を戒める。

(つーか声返せよ)

不便な状況に慣れる気はない。

この状態を受け入れる気はさらさらないのだ。
しかし聞こえるのは拒否の言葉。

「嫌ですよ」

即答だ。迷うそぶりすら見せやしない。

いい加減、疲れてきたぞ。

誠也は心の中で嘆息する。

「大事なお得意様なんですから、頑張らなくては」

誠也に声を返したら、他にその特殊な生物の好みの声をまた探さなければならぬ。

また万が一に見つからなければ、その注文を断らなければならぬのである。

他の同業者の店から取り寄せるのは主義に反するうえに、

友留の店の信条である”なんでも自分で直接そろえて売る”という考えの信用が落ちては困る。

逆にそもそもの注文を断ったりしたらその後、お得意様が去る可能性を生んでしまうことになる。

それは痛いので、友留も顧客の願いを叶えんがために踏ん張るしかなかった。

いまだかつて、そこまで熱心な幼馴染をみたことがなかった。

様々な思惑の中で自己の利を見出さんとする、商売気が満々の友留を目の前に対峙していた誠也は、呆れると同時に感心すらした。

まだ高校生のはずなのに、どうやらこいつはもうとつくに立派な商売人なんだな。

なんてことを誠也は頭の片隅で思った。

甘さを残したままで（前書き）

ぐだぐだです。

甘さを残したままで

けれども。

（だから。って人の声を盗むんなよな。しかも無断で！）

なんだか馬鹿馬鹿しいこの非現実なことも、どうでもいいようなことを少し口にする事によって、どうにかこうにか現実として受け止められるような心境に誠也はなってきた。

但し、このまま声を失うことを受け入れる気は全くないが。

「いいじゃないですか。減るものじゃないですし？」

そこで言った友留の発言はまるで誠也の心の声を拾ったかのように自然と会話の流れにあてはまる。

（なんで疑問系！？ いやちょっと待て、減るから。つつかなくなるから）

不思議そうな顔をする友留に誠也は必死に言い募る。

何としても声を取り戻すために、ない知恵をしぼって考える。

テストでもこんなに頑張ったことないぞ。

打開策は何かないのか！

今にも去る体勢を崩さないままの会話の中で、なんとか友留を引き止めるようと、

試みるも時間を気にして誠也の中で焦りは否応にも高まる。

とりあえず思いついた疑問を手当たり次第にぶつけてみる。

（声とるつつたつて、せめて録音でいいだろ！？）

「何言っているんですか。そんなの駄目に決まっているじゃないですか」

そこらへんにある一般のものとは違う魔術のためのものなのだ。特殊なものに使うのにそんな簡単なものでは効果が薄れて期待できない。

ただの物質と魔術の考えも区別がつかない相手との話しは労力を使う。

基本知識のない奴とやり取りするのは意味が通じあわないうえに多量の説明を必要とするので時間もかかるし面倒だ。

友留は苛苛とした表情を浮かべる。

どうせ話しても理解できない相手にこれ以上時間を費やしたくはない。

そろそろ忍耐の限界地に達してしまいそうだ。

元来、自分は忍耐強い方であるが今は急ぎの用件があるのだ。

もういいだろう。

「あーもうしつこいですねえ。仕方がないです。この手は使いたくありませんでした」

そう言うなり懷から何かを取り出すと、友留はいきなりそれを誠也に投げた。

投げつけられたことにより、空を飛んだ物質は誠也の眼には一瞬だった。

顔面に思いつきり当たり、グチャツと何かがつぶれる音がする。至近距離からの攻撃に不意を突かれた誠也は気が動転していた。

（なんだあ！？　これは？？）

視界をふさがれ、思考は止まる。

「それじゃあ」

友留が逃げる！

そう思つて慌てるが、顔全体に何かがべつとりついていて重い。べたつきがすごい。

咄嗟につぶつてしまった目は強固に閉じられ、誠也は開けることができない。

去り際に残された言葉は視界のきかない誠也への友留の親切か。

しかし友留の発した声のおかげで去つてしまうのだとわかつて、何もできない。

口惜しいままに、深呼吸をして冷静さを取り戻す。

とりあえず目の周りだけでも、と両手で顔を何度も拭う。

数分かけて拭うと目を開けて、手のひらを見る。

するとそこには白い粉と液体の混じったものがあつた。

なんだろう、と思つたい誠也は恐る恐るの表情を浮かべる。

次いで、唇にも付着した白い粉を舌で思い切つてなめてみた。

（甘い…）

そういえば友留はかなりの甘党だった。
つまりは

（あいつのおやつか何かだったのだろうな）

友留は常に自分用のお菓子を持ち歩いているのだ。

たまたま後で食べるはずで懐に入れておいた食べ物を他に適当なものか思いつかなかったために使ったのだろう。

投げつけるには高度がなく、外傷にはなりえない。

おまけにやわらかなそれは、誠也に視界を覆うのに一役買った。

そついうことだな、と誠也は推測した。

タオルで顔を拭くと、足元に砂糖の取れた丸いクッキーのようなものが転がっていたのを誠也は見つけた。

（あーこれか）

小さな粒サイズのクッキーをつまみ上げる。

砂糖を練りこんだずいぶんややわらかな生地にクッキーのかけらをまぶしたようなお菓子だったようだ。

甘党なアイツ専用に調理されたものだろう。

（それにしても困ったなー。どうしようか。あいつにとられた俺の声。結構不便だなー。手話なんか使えねえし。つつか使えても周りに通じないけどな。筆記はいちいち書くのが面倒くさいし）

声を失ってからまだ数時間しか経っていない。

なのに、すでに誠也はそのことに対しての不便さを感じていた。

（このまま明日学校行ったら、めっちゃしんどそー）

想像するだけで疲れるのが目に浮かぶ。

いや、もう想像だけで疲労感が増えていくようだった。

ふとカレンダーに目をやると、翌日は休みであることがわかった。

（ふうん。なら明日の心配はいらないな。でも、どうせなら）

誠也はクローゼットから動きやすそうな服を見繕って取り出すと着替え、こっそりと家を出た。

玄関をからりと開けて、足を一歩踏み出すと誠也は駆け出した。

甘さを残したままで（後書き）

こうして友留はその日のおやつを泣く泣くあきらめることになった。
でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7551/>

現遊びの夢幻

2010年10月13日04時26分発行